

# 東日本大震災後のストーリー分析の可能性 ——マンガ作品を事例として<sup>1)</sup>

池 上 賢

## 1. 問題意識——東日本大震災とメディア

本稿では東日本大震災に関する談話をナラティブあるいはストーリーという観点から分析する可能性を検討する。2011年3月11日に発生し、津波や原発事故など甚大な被害をもたらした東日本大震災から5年以上が経過した。この間、地震や関連した災害に関する膨大な情報が、さまざまなメディアを通して流通した。また、一定の期間を過ぎた後は、震災時におけるメディアについて検証が行われた。

たとえば、業界団体が発行する雑誌などでは、テレビや新聞の報道内容や震災時に果たした役割などについて検証が行われた。日本新聞協会が発行する『新聞研究』は、2011年6月号(719号)から2012年7月号(732号)まで「東日本大震災と報道」という特集をほぼ毎月掲載していた。また、NHK放送文化研究所が発行する『放送研究と調査』でも、断続的に特集を組んでいた<sup>2)</sup>。さらに、メディア総合研究所が発行する『放送レポート』でも、232号から3号にわたり「震災・原発事故とテレビ——NHK・民法の初動70時間を検証する」を掲載していた。

社会学・メディア研究の領域においても、東日本大震災におけるメディアについて検証が行われた。この領域では報道のみならず、インターネットのソーシャル・メディアなどにおける情報の流通についても注目している。たとえば、福田充らは、『大震災とメディア——東日本大震災の教訓』(福田編 2012)において、被災直後のメディアの

果たした役割や、震災関連のテレビ報道が人々にもたらした影響、広告とメディア・キャンペーンなどを多角的に検討した。その一方で、東日本大震災で発生したデマや流言の特徴として「メールやtwitterなどのインターネット上で広まった」点を挙げている(福田編 2012: 105)。また、遠藤薫らは、ソーシャル・メディアに関連した論点として「原発事故に関する専門知の共有」「寄付のプラットフォームとしての機能」「デマの拡散という問題」などを取り上げている(遠藤・西田・関谷 2011: 273-306)。このように東日本大震災とメディアをめぐるっては、報道およびインターネットにおける情報の流通について検証がなされたといえる。

一方で、東日本大震災について十分に検証されたとは言い難いメディアに関連する現象も存在する。たとえば、ソーシャル・メディアは東日本大震災において日本や日本人に関する談話<sup>3)</sup>を流布する役割も果たした。140文字の“つぶやき”を投稿することが出来るソーシャル・メディアであるtwitterでは震災直後、以下のようなつぶやきが存在した。

日本の自衛隊って世界中で唯一、殺した人間の数より助けた人間の数の方が多い武装集団なんだって。これって、誇りだよな。ありがとう、自衛隊！ガンバレ自衛隊！！  
#PRAYFORJAPAN<sup>4)</sup>

外国人から見た地震災害の反応。物が散乱

しているスーパーで、落ちているものを律儀に拾い、そして列に黙って並んでお金を払って買い物をする。運転再開した電車で混んでるのに妊婦に席を譲るお年寄り。この光景を見て外国人は絶句したようだ。本当だろう、この話。すごいよ日本。<sup>5)</sup>

また、匿名巨大掲示板2ちゃんねるでも、日本の道路の復旧の早さを紹介した海外の記事を翻訳して紹介したスレッドを見ることが出来た<sup>6)</sup>。

実のところ、このような談話はインターネット上に限らず、一般書籍などでも見ることができる。たとえば、2011年に発行された新書『世界が感嘆する日本人——海外メディアが報じた大震災後のニッポン』（大野 2011）では、海外のニュースなどで日本の治安の良さや、日本人の秩序の正しさが頻繁に報道されているという指摘があった。

ほとんどのアメリカの報道に共通しているのは、日本政府の無能さ、リーダーシップの欠如だ。そしてそれらとは対照的に、日本人の「ガマン強さ」、「シカタガナイ」という表現に代表される、運命を受け入れる精神、自分を差し置いて他人のことを思いやる無私無欲、みんなで助け合う集団としての協力精神、秩序を乱さない精神、平等の精神、感情を抑制する精神のすばらしさが伝えられていた。（大野 2011：36）

このように東日本大震災では、地震や津波などの災害に関する情報だけでなく、災害時における行動などから日本人について何らかの事柄を主張する談話が、書籍などにおいて流布していた。

また、映画やドラマなど主に架空の物語を提供する娯楽メディアにおいても、東日本大震災を直接的・間接的に取り扱った作品が数多く存在していることは注目に値する。例として、2013年に放送され劇中で東日本大震災を取り扱ったNHKの連続テレビ小説『あまちゃん』が大きな注目を

集めたことは記憶に新しい。また、東日本大震災が直接的に取り扱われていなくても、震災と関連づけて評されるコンテンツも存在する。2016年に公開されたゴジラシリーズの新作映画『シン・ゴジラ』では、作中の描写から東日本大震災と関連づけて批評するという事例が数多く存在する。たとえば、批評雑誌『ユリイカ』が2016年に発行した増刊号では「『シン・ゴジラ』とはなにか」という特集が組まれている。執筆者の一人である小泉悠はシン・ゴジラについて「それが2011年3月11日以降に発生した事態の化身であることは、映画を見た人にはほぼ明らかであろう」（小泉 2016：87）と評している。

このように、東日本大震災では、報道以外のメディアによっても、さまざまな談話が、さまざまな媒体を通して流通した。もちろん、現代社会における複雑化したメディア環境を考慮すれば、このようなこと自体は驚くべきことではない。しかし、このような状況を見たとき、社会学あるいはメディア研究は、東日本大震災に関する多様な談話が、多様な媒体をとおして流通しているという現象をどのように分析していけばよいのだろうか。

以上を踏まえて、本稿では東日本大震災に関連して流布した談話について分析する視座を検討したい。具体的には分析に有効な視座として、ソーシャル・メディアで流布した言説や娯楽メディアの内容、さらには場合によっては報道などについても包括できる分析視座としてナラティブ、あるいはストーリーに焦点化することを提示する。その上で、具体的な議論に向けた試みとして東日本大震災を取り扱ったマンガ作品について探索的な検討を行う。

## 2. 分析視座の検討——ストーリー／ナラティブへの焦点化

前節では、東日本大震災に関連した多様な談話が、さまざまな媒体を通して流通していたことを確認した。では、どのような分析を行うことが可

能であろうか。ここで主張したいのが、さまざまな談話にはナラティブ、またはストーリーと同定しうる事柄が含まれている点である。なお、以下ではストーリーという呼称を原則として使用するが、論者によっては厳密に区分けせず使用する場合もある。

ナラティブあるいはストーリーは、談話に含まれる概念であり、社会学、心理学、文学などさまざまな学問分野において使用されている。その定義についてはさまざまな議論があるが、本稿では野口祐二による定義を参照したい。野口はCzarniawskaの議論を参考とし、ナラティブの特徴として、「複数の出来事の連鎖、すなわち、複数の出来事を時間軸上に並べて順序関係を示すこと」をあげる。また、ナラティブに複数の出来事の関係を示す「プロット」(Aが原因となりBが起こったなど)が加わったものを「ストーリー」と呼称する(野口2009:2-3)。

たとえば、新聞・テレビなどのマス・メディアで報道された内容の多くは、ストーリーといえる。東日本大震災に関する報道については、当然のことながら「地震が起こった結果」「何らかの被害が生じた」というストーリーを見ることができる。先述した『あまちゃん』などのような東日本大震災を取り上げたフィクション作品もなんらかのストーリーを受容するためのものであるといえるだろう。

また、広告キャンペーンなどもストーリーを提供する媒体であると考えることができる。たとえば、先述の福田らは、東日本大震災に関連する広告キャンペーンについて考察している。それによると、東日本大震災発生後、人々を支援する目的で制作されたキャンペーンが「テレビCMだけでなく」「新聞広告や街頭ポスターなどのOOH(アウト・オブ・ホーム)メディアなどさまざまな形の広告を活用させて」実施された。たとえば、テレビについて見れば、「ひとつになるう日本」(フジテレビ)、「つながろうニッポン!」(日本テレビ放送網)といったメディアキャンペーン(福田

編2012:43)が存在したという。これらのキャンペーンで用いられているフレーズは、単なる呼びかけに見えるかもしれない。しかし、実際には「ひとつになる」ことにより東日本大震災という困難な状況を乗り越えていこうというメッセージが含意されており、複数の出来事を時間軸上に並べて関連づけるストーリーであるといえる。

さらに、ソーシャル・メディアなどにおいて流布するつぶやきや、匿名掲示板などへの書き込みもストーリーとなる可能性がある。先ほど紹介した「外国人から見た地震災害の反応」というtwitter上で公開されたつぶやきを見てみよう。ここでは、被災した直後にも関わらず、「物が散乱しているスーパーで、落ちているものを律儀に拾う光景を見て、「外国人は絶句した」という、複数の出来事を結び付けられて語られている。このtwitter上のつぶやきは、震災に関連して流布したストーリーの典型的な事例の1つといえるだろう。つまり、東日本大震災に関連しては、ソーシャル・メディア上においても、日本人に関するストーリーが多数流布していたと考えることができる。

ここまで、さまざまな媒体で流布する談話にストーリーが含まれていることを確認した。では、東日本大震災とメディアに関連して、なぜストーリーに着目するべきなのだろうか。第1にストーリーという分析視点を持つことで、さまざまなメディアにおいて流布している多様な談話について包括的な分析が可能ながあげられる。先ほど述べた通り、東日本大震災に関連する談話は、報道のみならず、ソーシャル・メディア、娯楽メディアなど多様な媒体を通して広まった。当然のことながら、それぞれの媒体について特化した分析は必要である。しかし一方で、それぞれの媒体ごとの談話がどのような関係にあるのかという点について分析を行う必要は別途存在する。ストーリーという概念を設定することは、媒体ごとの分析に偏りがちなメディア研究に、比較分析の可能性を示すものになると思われる。

第2に、第1の論点と関連してストーリーという概念を設定することで、個人的なストーリーと社会的なストーリーの相補関係を把握できるというのも重要である。たとえば、社会の中で共有されるセクシャル・ストーリーについて分析したKen Plummerは、レイプ・ストーリーに関する分析の中で、かつてレイプには男女ともに対照的なストーリーがあったと指摘する。1つは「男性は性的に積極的であり」そのことは「仕方のないことであった」というもの、もう一つはレイプをされるのは「尻軽女」あるいは「異常な女性」であるというものである(Plummer 1995=1999: 135)。Plummerによれば、このようなストーリーは1970年代以降、レイプを受けた当事者の女性が、本、集会、コンシャスネス・レイジング・グループなどで、自身のナラティブを語る中で変化した(Plummer 1995=1999: 137-138)。そして、レイプに関するストーリーは「レイプは権力および攻撃と考えられ」、「レイプ被害が広範囲にわた」り、その恐怖は「女性の生活を規制し統制する様式」などに見なされるようになった(Plummer 1995=1999: 143-150)。Plummerはさまざまなストーリーが語られる中で、社会の中で共有されるストーリーが変容していく様子を描写している。

もちろん、社会の中で共有されたストーリーが、人々の解釈枠組みとなることもある。先述した、Plummerは「他者が経験する性的危険のストーリーは正しくは私たちのストーリーではないかもしれないが、それは私たちに自分の苦痛を理解する象徴や手がかりを提供してくれる」(Plummer 1995=1999: 161-162)と指摘する。また、ライフストーリー研究者である桜井厚は社会全体や特定の社会集団で共有されているストーリーを類型化し、マスター・ナラティブとモデル・ストーリーという概念を提示している(桜井2002: 36)。それによると、マスター・ナラティブとは、社会的に共有され支配的な位置を占めるストーリーであり、社会的規範やイデオロギーを具現する。一

方で、モデル・ストーリーは特定のコミュニティに共有されているストーリーであり、マスター・ナラティブと共振することもある一方で、対立や葛藤を引き起こすこともある。桜井は被差別部落に関する調査の中で、ある男性が語った「主要な生産関係から閉め出されている」(桜井2002: 254)というフレーズに注目する。桜井によればこのフレーズは、部落解放同盟の第16回全国大会における宣言から借用されたものである。桜井はこのような「○○しかなかった」という語りや、他のインタビューでも使用されることを踏まえ、「運動方針にしたがってコミュニティ内で醸成されたモデル・ストーリーの一種」であるとしている(桜井2002: 255)。つまり、特定のストーリーはただ社会の中で提示され共有されるだけで完結するのではなく、しばしば人々が社会について考え語るときに、解釈の枠組みとなる性質を持つのである。

野口裕二はナラティブ・アプローチについて、ミクロレベルである「個人をめぐるナラティブ」、メゾレベルである「集団や組織のナラティブ」、マクロレベルである「社会全体を覆うようなナラティブ」の3つの対象レベルが存在すると指摘する(野口2009: 22-23)。これを踏まえると、桜井やPlummerの議論はそれら3つのレベルの関連も分析が可能であることを示している。

ここで、改めて東日本大震災について、どのようなストーリーが存在するのか野口の分類を踏まえて考えてみる。たとえば、東日本大震災の時にはtwitterやソーシャル・ネットワーク・サービスなどのソーシャル・メディアにおいて自分自身の経験に関する談話が流布されていた。これは「個人をめぐるナラティブ」と考えてよいだろう。さらに、このような談話の中には、たとえばtwitterのリツイート機能によって多くのユーザーに拡散されたものも存在した。これは「個人をめぐるナラティブ」が「組織や集団をめぐるナラティブ」に変容したものと考えられる。もちろん、インターネットなどのデジタルな媒体を介さ

ない地域コミュニティなどで共有されたストーリーも存在しただろう。最後に、テレビや新聞などのマス・メディアでは「社会全体を覆うようなナラティブ」が流布された。もちろん、先ほど述べた「個人をめぐるナラティブ」や「組織や集団をめぐるナラティブ」がインターネット上で広く広がることにより「社会全体を覆うようなナラティブ」に変化することもあっただろう。いずれにしても、ストーリーに関する議論はこれらのナラティブについて、その関連性を分析する可能性を示しているといえる。

このように東日本大震災に関する様々なストーリーは、日本社会に生きる人々にとって、東日本大震災を意味づけていく際に解釈枠組みになる可能性がある。後述するが、このようなストーリーは、抑圧的に作用することもあれば、自分の経験を他者に提示する支えになる可能性もある。

### 3. 事例の検討

#### 3.1 マンガという事例

ここまで、東日本大震災に関するストーリーを分析する可能性を提示した。それでは、具体的にはどのような分析が行えるだろうか。先ほど述べた通り、ストーリーに関する研究はその対象を幅広く設定が可能である。そこで、本章ではその一例として東日本大震災を取り上げたマンガ作品に注目したい。

東日本大震災後、これを取り上げたマンガ作品が数多く発表された。マンガを取り上げる理由は次の通りである。まず、マンガはフィクション、ノンフィクションを問わず日本においてストーリーを提供する重要な媒体の一つである。さらにマンガの特徴についてテッサ・モーリス＝スズキは歴史表現メディアとしてのマンガの持つ力と問題を以下のように指摘する（モーリス＝スズキ 2004：191-244）。

まず、「漫画は、写真や映画に見られるリアリズム規範にしばられないため、ほかの手段ではと

らえられない過去のイメージを視覚化出来る」（モーリス＝スズキ 2004：192）。たとえば、取材に基づくフィクションとして、被災者の通常であれば映像化出来ない経験を描くことも出来る。さらに、マンガは「過去の重要な経験について、読者をどちらかの側の“観点にすえる力”がある」（モーリス＝スズキ 2004：221）。たとえば、さまざまな人々の経験に読者を関与させることが可能になる。

ただし、マンガという表現に問題がないわけではない。たとえば、マンガの「観点に据える力」は、特定の経験だけが特権的な位置を占めるようなストーリーを提示する可能性もある。また、モーリス＝スズキはマンガについて「前に見たことのある別のイメージとの連想——が内包されている」ため、「漫画に、たとえば、死や負傷の一見凄まじい描写があっても、感動や衝撃をそれほど感じなかったり、おもしろさや快い刺激を感じることもさえないかもしれない」（モーリス＝スズキ 2004：197）と指摘する。たとえば、東日本大震災を描いた作品において被災した当事者が辛くも津波から逃れるという描写があっても、描き方によっては「スリル満点の脱出劇」としてとらえられ、その悲劇性などが覆い隠されてしまう可能性があるかもしれない。

このようにマンガは、いくつかの問題点があるものの歴史的な出来事といえる<sup>7)</sup> 東日本大震災とメディアについて、特に報道以外の媒体と考えるときに、重要な媒体の一つといえるのではないだろうか。

ここまでの議論を踏まえて、本稿では、筆者が収集した東日本大震災を扱ったマンガ作品を紹介した上で、それらの作品でどのようなストーリーが提示されているのか検討し、分析課題を提示したい。先述したように、東日本大震災では“日本人”“日本”に関するストーリーが数多く提供されている。では、マンガではどのようなストーリーが流布されているのだろうか。あるいは、それ以外にどのようなストーリーが提示されている

のだろうか。

### 3. 東日本大震災を扱ったマンガ作品

#### 3.1 分類作業と結果

本節では、筆者が収集した東日本大震災を取り扱ったマンガ作品について、分類とストーリーの分析を試みる。筆者は、2011年以降、東日本大震災を取り扱っているマンガ作品を収集している。元々、年間に膨大な量が発行されるマンガ作品について網羅的・体系的な作品収集は困難である。しかし、これらの作品について概観することで今後の分析可能性を検討することは出来ると思われる。そこで、本稿では水野節夫による簡易整理法（水野 2000：335-357）の手法を用いた分類作業と、ストーリー（ナラティブ）に関する先行研究に基づく探索的な検討を試みた。

まず、分類作業の結果について記述する。東日本大震災を取り扱った作品は、2つの軸で分類することができた。1つ目の軸は、東日本大震災を中心的に取り上げているか、そうでないかという軸である。前者の作品は、東日本大震災発生後に、当該の事柄について中心的に調べるために執筆された作品で、雑誌連載を経ず直接単行本で発売される作品も見られた。一方、後者の場合、ほとんどの作品が東日本大震災発生以前から、マンガ雑誌などにおいて連載されていた作品で作中の特定のエピソードで震災に焦点化するというものであった。

2つ目の軸は、フィクションであるかノンフィクションであるかという軸である。なお、この軸については、取材に基づき、架空の人物が被災地を訪れるという作品が数多く含まれるが、本稿ではそのような作品はフィクションに分類する。

以上2つの軸により本稿において取り扱う作品は…

- ① 東日本大震災が主要テーマではないフィクション（NF）

- ② 東日本大震災が主要テーマではないノンフィクション（NN）
- ③ 東日本大震災が主要テーマとなるフィクション（MF）
- ④ 東日本大震災が主要テーマとなるノンフィクション（MN）

…に分類されることになる。なお、（ ）内は分類のための記号であり、当該の記号に暫定的な番号をつけたものを作品毎のIDとしている<sup>8)</sup>。ただし、東日本大震災が主要なテーマではない作品と主要なテーマとなる作品、あるいはフィクションとノンフィクションが両方とも収録されている作品が1つ存在した。そのため、該当作品は別途表に記載している。

次に、作品を講読する中で、頻繁に登場する要素については個別に析出し、当てはまるかどうかを表にまとめることにした。具体的には以下の要素である。

- ① 主人公／作者が被災した体験に関する描写
- ② 主人公／作者以外の他者が被災した経験に関する描写
- ③ 登場人物による被害の大きかった地域への訪問
- ④ 津波被害に関する描写
- ⑤ 原発事故に関する描写
- ⑥ 被災地のがれきなど、震災後の被害状況に関する描写
- ⑦ 日本・日本人への言及

以上である。なお、①から⑥については、いずれも台詞による言及ではなく、絵によって描かれている場合のみ“あり”とした。⑦については、言及のみでも“ありとした”。また、③については、最初から被害の大きかった地域に在住している作者によるエッセイなどが多く見られた。そのため、該当する場合“在住”と分類している。また、④から⑥については、登場人物がメディアを

通して見ている場合は“メディア”、登場人物により台詞などで言及されている場合は“言及”と分類している。最後に以上の結果を表にまとめた(表1~表5)。それでは、これらの作品についてのどのような傾向が見られるのか。次節以降、具体的な作品名を挙げながら検討することにした。

### 3.2 東日本大震災が主要テーマではないフィクション

始めに、東日本大震災を主要なテーマとしないフィクション作品について見ていく。

たとえば、『社長 島耕作』(弘兼憲史)では、主人公の島耕作が東京の本社で会議中に被災する。その後、韓国・中国のライバル企業の動向も描かれる中、島耕作は被災地を訪問し、支援活動を行う。そして、電力消費の少ない家電で世界一になることを決意する。当該のエピソードの中では、島耕作が「貧しいころの日本の方が何か“幸せ感”があったな」「豊かになればその分不幸も多くなる気がする」と述べ、「立てなおそうな 日本を」と瓦礫の山の中で誓う。

また、料理マンガ『美味しんぼ』(作：雁屋哲／画：花咲アキラ)の第108巻では、主人公たちが過去に取材に訪れた東北地方の各地を巡り、被災した人びとの状況を伝えるという物語が展開される。ここでも、被災したレストランの内部や、瓦礫の山が繰り返し描写され被害の大きさを伝える一方で、いずれの被災地でも被災した人々が前向きな発言を行っている。主人公はサブタイトルにもあるように、被災地の人びとを「めげない人びと」とし、「私たちも見習ってこの難局を乗り越える」と述べる<sup>9)</sup>。

また、関東某県で新任の児童福祉司として働く相川健太を主人公とした『ちいさいひと 青葉児童相談所物語』(夾竹桃ジン)の第2巻・第3巻でも東日本大震災が取り扱われている。震災特別編では、石巻の児童相談所の被災と、主人公によるボランティア活動が描かれる。ここでは、虐待

の危険性がある親子の被災状況が描かれた他、コラムで被災地における児童虐待の問題などが紹介されている。

このほか、震災に関連して発生する可能性がある詐欺被害を描く『新・クロサギ』(原案：夏原武・作画：黒丸)や、『美味しんぼ』と同じく食事に関する題材として駅弁を扱った『駅弁ひとり旅』、主人公が被災地にボランティアとして赴く『さすらいアフロ田中』(のりつけ雅春)、登場人物の一人が旅先で被災地奮闘する『ヘルプマン』(くさか里樹)、同名のバスケットボールを題材にしたスポーツマンガから東日本大震災に関する2つの番外編を収録した『あひるの空 BEST SELECTION』(日向武史)などが本項目に分類される作品である。

この分類に当てはまる作品は、いずれも現代の日本を舞台とした作品である。また、個別の要素に注目すると、11作品中8作品で、被災地を訪問するというエピソードが見られた。特に老人介護をテーマとした『ヘルプマン』では登場人物が旅先で被災していた。これは、主要登場人物の多くが東京在住としている作品が多いからであると思われる。これらの作品では、東日本大震災に関する被害状況について、一般的な被害状況を網羅的に描くというよりは、作品のテーマと関連づけた被害に関する描写が多かったといえる。ただし、視覚的な要素として、11作品中8作品で瓦礫の描写などがなされ被害の大きさが強調されていた点はマス・メディアなどで流布されたイメージと大きな違いはないといえる。

### 3.3 東日本大震災が主要テーマではないノンフィクション

次に、東日本大震災が主要テーマではないノンフィクション作品をとりあげたい。ここで紹介する作品も、震災発生以前から連載・発表されていたノンフィクション作品であり、エッセイマンガなどが含まれている。

井上純一が中国人の妻との日常生活を4コママ

ンガで描く同名のブログを書籍化した『中国嫁日記』（井上純一）2巻では、震災当時、東京に在住していた作者と妻の経験を描いている。ここでは、地震が少ない地域の出身のため、地震に慣れない妻の被災時の感情なども描かれている一方で、最後は作者の妻が希望を語るほか、あとがきには、作者の妻による日本人の『絆』に対する感動が示されている。

作者自身の実家と仕事場の庭に設置された野鳥のエサ台の観察などを描いたエッセイマンガである『とりパン』（とりのなん子）の第11巻には東日本大震災に被災した時のエピソードが含まれている。この作品では、作者は自動車を運転している最中に地震に遭遇する。その時は、事の重大さに気付かず、余震や停電などのなかで徐々に被災したことを実感する。最後は、作者自身がこれからも日常を描いていくことを決意する。

このほか、作者がテレビで視聴した原発事故に関する不安が描かれているエッセイマンガ『うちの妻ってどうでしょう』（福満しげゆき）や、作者が被災地に訪問する描写がある『まんが親』（吉田戦車）など7つの作品がこの分類に含まれる作品である。なお、『ブッシメン!』（小野洋一郎）および『ゴーガイ』（飛鳥あると）は、別作品の単行本巻末に数ページの作者の体験談が掲載されたものとなっている。

これらの作品は全て地震発生時の作者の体験を描いているところが特徴である。また、津波被害や原発事故などについては、メディアを通して作者が知るという描写が見られた。これらの作品は、個人の経験を描いたものが多いといえる。

### 3.4 東日本大震災を主要テーマとするノンフィクション

次に震災後に発表された東日本大震災を主要テーマとするノンフィクションの作品を紹介する。本稿では6作品を紹介するが、この内4作品は東北地方に在住する作者が自分自身の体験や被災者の経験を描いたものとなっている。また、2作品

は東北地方在住ではない作者が取材に基づき描いたものである。

はじめに、東北地方に在住する作者による作品から見てみよう。『震災7日間』（槻月沙江）は、仙台在住のマンガ家の経験を描いた作品である。元々は、イラスト投稿サイト“pixiv”に投稿されたラフを、書き下ろし作品と合わせて書籍化したものとなっている。本作では、地震発生時の作者の感情やその後の状況が描かれる。作者は、実家に一時避難することになるが、直後、作者の子供が地震発生時に書いた習字の紙（希望）が空に舞い上がる場面で終わる。

『3.11 東日本大震災——君と見た風景』（平井寿信）は仙台在住の陶芸家、イラストレーターである作者の震災経験となっている。作者は在宅中に地震に遭遇したが、やはり「死」を意識したことなど、自身の感情などが描かれている。なお、基本的には4コマ形式であるが、最初の揺れが発生した場面のみ通常のコマ割で描かれる。さらに、作中では何度か「安全神話」への疑義が描かれており、最後は余震が継続していることが描かれる。

『わたしたちの震災物語』（井上きみどり）は仙台在住の漫画家井上きみどりが、「被災者として感謝と敬意をこめて 支援してくれた団体と被災者の体験談とレポート」（井上きみどり 2011:4）する作品である。被災者の当時の心情などにも触れる。そして、最終章は、作者自身の話であり、やはり希望を示唆する内容になっている。

『1年後の3.11 被災地13のオフレコ話』（ゆうみ・えこ）は仙台市在住の作者によるコミックエッセイである。本作品では作者の経験・作者以外の経験、両方が描かれている。また、全体として政治・政府批判が非常に強いのが特徴となっている。ここまでが東北地方で被災した当事者による描かれた作品である。

このように、東日本大震災を主要テーマとするノンフィクションでは4作品で作者自身の経験が描かれており、前節でとりあげた東日本大震災を主要なテーマとしてないノンフィクションと共通

している。また、いずれの作品においても、主要なマス・メディアでは十分に報道されなかった事柄が取り上げられている点にも注目したい。たとえば、『震災7日間』では震災から1か月後に起こった余震を取り上げ「ひとびとの記憶にはならないかもしれない」としながらも「みんなの気持ちを悪夢に巻き戻した」（槻月2011：86-87）と当事者にとってのショックの大きさを示している。また、『3.11 東日本大震災』では、作者が自転車泥棒を目撃した場面があり、インターネット上などで流布された「秩序正しい日本人」を主張するものとは異なる治安への不安が示されている（平井2011：36）。また、『わたしたちの震災物語』ではマス・メディアではあまり触れられていなかった被災したペットの話題（井上2011：109-121）なども取り上げているほか、『1年後の3.11』では、伝聞という形ではあるが津波から逃げようとする車が避難する人々を跳ね飛ばしていったなどという衝撃的なエピソードも取り上げている（ゆうみ2012：23-24）。

続いて、東北地方在住ではない作者による作品を見てみよう。『さんてつ——日本鉄道旅行地図帳三陸鉄道大震災の記録』（吉本浩二）は三陸鉄道の被災から復旧までを関係者に対する取材を中心に描いた作品である。ここでは、地震によりトンネルの中で停車してしまった運転手と乗客の恐怖などが描かれた他、被災当時の様子よりも、復旧に向けた活動を中心に取り上げ、国からの支援にも触れている。また、印象的な場面として遺体安置所の様子なども取り上げている。最終回はあらためて作者が現地を訪れ、復興の様子を眺める場面で終了している。

『僕と日本が震えた日』（鈴木みそ）では、筆者自身の経験も描かれているが、「身近な震災にスポットをあてるマンガ」と述べ、書籍流通への影響や、正しい放射線の測り方、経済への影響などを、専門家への取材に基づき描いている。とくに主要メディアでは報じられてなかった「東京から一番近い被災地と言われる」（鈴木2011：11）浦

安の被災状況について詳細に描写している。また、出版業界における震災の影響にも触れているほか、福島第1原子力発電所事故に関連して、放射線の専門家の講演なども取材している。

このように東北地方在住ではない作者による作品も、東日本大震災についてマス・メディアとは異なる視点から描写しようとしていることが分かるといえる。

### 3.5 東日本大震災を主要テーマとするフィクション

次に東日本大震災を主要テーマとするフィクションを取り上げたい。この分類に当てはまる作品は非常に少なかった。

まず、『いつか、葉の花畑で——東日本大震災を忘れない』（みすこそ）は「東日本大震災に関するニュース記事や見聞をもとに、被災者の方々の人生に思いを寄せ、著者が創作したフィクション」（みすこそ2011：6）である。本作に収録された作品のほとんどが、生死に関する物語を扱っている。たとえば、孫を守ろうとしたおばあさんの物語（最終的には2人とも亡くなってしまう）や、飼い主を失った犬の話、入院中の患者を守れなかった看護婦の話などが語られる。そして、物語のエピローグは、母親を失った娘が卒業式で自身の決意を答辞として語り終了する。本作品は、フィクションとなっているが、内容としてはノンフィクション作品に近いといえる。

『原発幻魔大戦』（いましろたかし）は架空の会社員の男性が原発やTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）などを推進する政府への不満をモノローグを中心に提示している。主人公が南相馬を訪ねる様子も描かれているほか、TPPに関する批判も含まれている。原発だけでなく、TPPへの反対も表明するなど、政府に対する不満が中心的に描かれている。また、被災地を訪問する様子が描かれているが、ほとんどのエピソードは東京を中心に展開する。

『なのはな』（萩尾望都）は、震災に関連する事

項をテーマにした作品集である。被災直後から数年以内と思われる福島の子どもを描いた作品「なのはな」「なのはな——幻想『銀河鉄道の夜』」のほか、放射性物質プルトニウムを擬人化した「ブルート夫人」「サロメ 20 × ×」、ウランを擬人化した「雨の夜—ウラヌス伯爵—」などが収録されている。本作は、ここまでで紹介した作品と大きく異なり、現実の日本社会を舞台とせず抽象化した形で、原発を批判する内容が描写されている。

このように、この分類に当てはまる作品は、いずれも異なった内容でテーマなどを除くと共通する点は少なかったといえる。

### 3.6 その他の作品

最後に、複数の分類に属する作品が同時に収録されている作品を紹介したい。『あの日からのマンガ』（しりあがり寿）はタイトルの通り、3.11以降の作品を収録した単行本である。まず、東日本大震災を主要なテーマとしないフィクションに該当するのが、朝日新聞夕刊掲載の4コママンガ「地球防衛家のヒトビト」である。本作品では、震災後の日常が描写されている。それ以外の作品は、マンガ雑誌に連載された短編作品である。例として震災から50年後の世界を描いた「海辺の街」、一人の女性が東京から離れることを決意するまでを描いた「震える街」、セシウム・プルトニウムなどが擬人化された「希望」<sup>10)</sup>などが掲載されている。これらの中には、前節で紹介した『なのはな』の短編と同じく、現実の日本を舞台としない抽象的な描写がある作品も含まれている。

## 4. まとめ

ここまで、筆者が収集できた限りではあるが、東日本大震災を取り扱ったマンガ作品について、概観した。それでは、このような作品群を踏まえて、どのような論点を析出することができるだろうか。筆者としてはマンガによって描写される東日本大震災に関するストーリーが、先述したマス

ター・ナラティブとして作用する可能性と、モデル・ストーリーとして作用する可能性を指摘したい。

まず、本稿の分析では、いくつかの作品において、日本・日本人に関する言及が含まれていた。このような言及は、分類を問わず、多くの作品に見ることができたが、特に東日本大震災を主要なテーマとはしないフィクションである『社長 島耕作』・『美味しんぼ』・『傷だらけの仁清』などでは、今回の東日本大震災が日本人全員にとっての災害であるという点が明示されていた。特に『社長 島耕作』では「日本は一丸となって復興に邁進すべき」（弘兼 2011：68）というセリフも存在する。

また、視覚的情報について見ると、今回取り上げた作品では、多くの作品において津波が沿岸部に押し寄せる描写、原発が爆発する描写、震災後の被災地におけるがれきの描写が見られた。このようなイメージはマス・メディアにおいても流布していたものである。したがって、マンガ作品も、東日本大震災の視覚的表象を再生産し、固定化する役割を果たしていた可能性がある。

ここで、歴史学者の金澤宏明による指摘を参照したい。金澤は、ケネス・E・フットの「記念碑」に関する議論に触れ、次のように主張している。

これ（筆者、補注「記念碑」のこと）は歴史的出来事がある種の表象ないし、記号となり、集合的記憶として集約・収斂してしまう可能性を示す。今後、政治的・社会的な選択を経ながら、大きな物語としてのマスターナラティブ化が進み、小さな1人ひとりの経験が忘却されていくことも考えられよう。（金澤 2012：49）

この議論を踏まえると、東日本大震災を取り扱ったマンガ作品は、人々の個別の経験や困難を抑圧する大きな物語となる可能性がある。また、

水出幸輝は「防災の日」に関する災害の記憶について新聞社説を分析する中で、関東大震災に関する記憶がナショナルなものとして再構成される一方で、伊勢湾台風に関する記憶が集合的に忘却されたと指摘している（水出 2016：171）。したがって、東日本大震災についても、この災害が他の災害（例えば阪神大震災）なども忘却させてしまう可能性はあると考えられる。以上をふまえると、マンガ作品がどのようなイメージやストーリーを再生産しているのかという点については、批判的に分析する必要がある。

ここまではマンガ作品の提示するストーリーが抑圧的に左右する可能性を示したが、その逆の可能性も検討したい。今回の分析では、マス・メディアでは十分に取り扱われていない、個別の事象について詳細に取り上げた作品も存在した。たとえば、東日本大震災を主要なテーマとしたいフィクション作品について見ると、『駅弁ひとり旅』『新クロサギ』『ちいさいひと 青葉児童相談所物語』『あひるの空』はそれぞれの作品の主題で東日本大震災に関連する事柄を取り上げている。また、東日本大震災を主要テーマとするノンフィクションである『震災7日間』『3.11 東日本大震災』『わたしたちの震災物語』『1年後の3.11』『僕と日本が震えた日』『さんてつ』、同じくフィクションである『いつか、菜の花畑で』でも、当事者の人々の経験が描かれる中で、主要なマス・メディアでは十分に報道されなかった出来事や、日本・日本人という枠組みに回収されない個人の経験が描写されている。

加えて、『あの日からのマンガ』や『なのはな』に収録された短編にも注目したい。これらの作品では、原発や放射性物質を擬人化した描写があり、原発に関連する問題について風刺が行われていた。茨木正治は、近年のストーリーマンガの隆盛を踏まえて、風刺マンガの衰退を指摘している（茨木 2007：90-91）。しかし、これらの作品は、マンガによる風刺の新たな可能性示すものになり得るかもしれない。

以上の点を踏まえると、今回とりあげたマンガ作品が提供するストーリーは、人々に大きな物語には回収できない個別のストーリーがあることを忘却させない機能を果たすかもしれない。つまり、金澤が指摘するような事項が進行する際に、歯止めとなるのではないだろうか。

最後に、今回の分析において取り上げきれなかった論点に触れることにしたい。今回の分析では、主に2012年までに収集した作品を紹介した。そのため、それ以降に発行されたマンガ作品は原則として取り扱っていない。しかし、東日本大震災を取り扱ったマンガ作品は本稿で取り上げたもの以外にも数多く存在する。たとえば、教育関連の企業であるBenneseはWEBサイトで震災を取り扱ったマンガ作品を公開している<sup>11)</sup>。さらに、2013年以降、福島第一原発で働く作業員が描いたルポマンガである『いちえふ——福島第一原子力労働記』（竜田 2014-2015）、や原発事故による放射脳の影響に関する一部描写で批判され議論となった『美味しんぼ』の「福島の真実編」（雁屋・花咲 2013-2014）なども発表されている。したがって、これらの作品群についてどのように収集・整理するかは今後の課題であるといえる。

また、マンガ作品について体系的な収集・整理が可能になった後は、冒頭においても指摘したように、他のメディアで流布された東日本大震災に関するストーリーとの関係性について分析する必要があるだろう。先述のとおり、東日本大震災に関するストーリーはあらゆるメディアを通じて流布されていた。それらがお互いにどのような関係にあるのかという点は重要な分析課題である。たとえば、特定のマスター・ナラティブが、他のストーリーを忘却させてはいないか、などの点について分析する必要があるだろう。本稿では、東日本大震災に関するストーリーを分析する必要性と可能性を検討した。いずれにしても、今後東日本大震災において流布されるストーリーは重要な分析対象であるといえる。

## 【註】

- 1) 本稿は、2012年9月27日に行われた日本マス・コミュニケーション学会 秋季研究会（於法政大学）ワークショップにて報告した「東日本大震災後の日本人像——震災を取り扱ったマンガ作品を事例として」に大幅に加筆・修正を加えたものである。
- 2) 「3月11日、東日本大震災の緊急報道はどのように見られたのか」「東日本大震災にみる大災害時のソーシャルメディアの役割」2011年7月号（722号）、「東日本大震災 発生から24時間 テレビが伝えた情報の推移」2011年12月号（727号）、「東日本大震災 発生から72時間 テレビが伝えた情報の推移——在京3局の報道内容分析から」2012年3月（730号）など。
- 3) なお、本稿では談話とは、「文より上位のレベルで一定のまとまりを有する言語行動、そして実際に、あるコンテキストでおこる言語行動、またそれを文字化したもの」（メイナード1997：1）として定義する。
- 4) <https://twitter.com/APRIL373/status/47556811762573312> 2016.11.28
- 5) <https://twitter.com/kiritansu/status/46335057689980928> 2012.09.15
- 6) 例として、<http://hatsukari.2ch.net/test/read.cgi/news/1301041926/> 2016.11.28
- 7) ただし、後述するように歴史的な出来事として現在進行形の問題が忘却されるのは回避されるべきと考える。
- 8) 最初のアルファベットが、東日本大震災が主要テーマであるか（Main/Not Main）、2つ目のアルファベットがフィクションであるかノンフィクションであるか（Fiction/Non Fiction）を示している。
- 9) なお、本作品については、第110巻・第111巻収録の「福島の実実」における内容をめぐり、議論が起こっている。当該の問題については、紙幅の都合のため触れることは出来ないが、マンガ表現の性質や科学的記述などについてマンガ研究の課題を提起している。
- 10) 実際の表題には×が上にかかれている。
- 11) 「震災記録マンガを読んで投稿しよう」<http://sho.benesse.ne.jp/s/land/ouen/manga/> 2016.12.25

## 【文献】

- 遠藤薫・西田亮介・関谷直也，2011，「東日本大震災とメディア」遠藤薫編著『大震災後の社会学』講談社：273-306。
- 福田充編著，2012，『大震災とメディア——東日本大震災の教訓』北樹出版。
- 茨木正治，2007，『メディアの中のマンガ——新聞一コママンガの世界』臨川書店。
- 金澤宏明，2012，「被災地市民の歴史——陸前高田市と大船渡市の『過去』『現在』『未来』」川村千鶴子編著『3.11後の多文化家族——未来を拓く人びと』明石書店。
- 雁屋哲・花咲アキラ，2013-2014，『美味しんぼ』110-111，小学館。
- 小泉悠，2016，「『シン・ゴジラ』が逆照射するもの」『ユリイカ』48（17），青土社：85-91。
- メイナード，K.，泉子，1997，『談話分析の可能性——理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版。
- 水出幸輝，2016，「『防災の日』をめぐる災害の記憶——1924-2014年における関東大震災周年社説をてがかりに」『マス・コミュニケーション研究』88：157-175。
- 水野節夫，2000，『事例分析への挑戦——‘個人’現象への事例媒介的アプローチへの試み』東信堂。
- モーリス・スズキ，テッサ，2004，『過去は死なない——メディア・記憶・歴史』岩波書店（田口泰子訳）。
- 野口祐二，2009，「ナラティブ・アプローチの展開」野口祐二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房：1-26。
- 大野和基，2011，「アメリカが報じた日本人」別冊宝島編集部編『世界が感嘆する日本人——海外メディアが報じた大震災後のニッポン』宝島社。
- Plummer, Ken, 1995, *Telling Sexual Stories Power, Change and Social World*, Routledge. (=1998, 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代 語りのポリティクス』新曜社.)
- 桜井厚，2002，『インタビューの社会学』せりか書房。
- 竜田一人，2014-2015，『いちえふ——福島第一原子力労働記』1-3，講談社。
- ※ なお、表1~5に含まれている作品については、重複するため文献リストに記載していない。

〈表 1〉東日本大震災を主要なテーマとしないフィクション

ID	タイトル	巻数	サブタイトル・話数	作者	出版社	発表年月	主要／非主要／	F/NF	主人公／作者の体験	他者の経験	被災地訪問	津波被害の描写	原発事故の描写	被災地のがれきりなどの描写	日本・日本人への言及
NF-1	ちいさいひと 青葉 児童相談書物語	2・3	震災特別編	夾竹桃ジン	小学館	2012.4.23 2012.10.23	非主要	F	あり	あり	あり	あり	なし	あり	なし
NF-2	リーチマン	2	『届かない叫び』 (前編・後編)	米田達郎	講談社	2012.12.21	非主要	F	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
NF-3	社長島耕作	10	STEP102～110	弘兼憲史	講談社	2011.10.11	非主要	F	あり	なし	あり	言及	メディア	あり	あり
NF-4	新・クロサギ	13・14	震災復興詐欺 I ～IV	夏原武・黒丸	小学館	2011.12.27 2012.4.4	非主要	F	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
NF-5	さすらいアフロ田中	4	第 43 話・ 第 44 話	のりつけ雅春	小学館	2011.7.19	非主要	F	なし	なし	あり	なし	なし	あり	なし
NF-6	傷だらけの仁清	15	最終話 人生	猿渡哲也	集英社	2012.1.24	非主要	F	なし	なし	あり	言及	あり	あり	あり
NF-7	美味しんぼ	108	被災地編・めげ ない人びと (1) ～ (9)	雁屋哲・花咲 アキラ	小学館	2012.3.5	非主要	F	なし	あり	あり	あり	あり	あり	あり
NF-8	駅弁ひとり旅		がんばっぺ東北 編	櫻井寛監修・ はやせ淳作画	双葉社	2012.3.6	非主要	F	なし	あり	あり	言及	言及	あり	なし
NF-9	ザ・松田	2	松田、高く上る ／松田、連れ去 る／松田、叫ぶ その 1～その 3	平松伸二	日本文 芸社	2012.4.10	非主要	F	なし	なし	あり	なし	言及	あり	あり
NF-10	ヘルプマン	21	震災編	くさかり樹	講談社	2011.11.17	非主要	F	あり	あり	旅先 で被災	あり	なし	あり	なし
NF-11	神の雫	31	不屈の熱と鋼か らを託せよ、希 望の街へ	作：亜樹直、 画：オキモト ＝シュウ	講談社	2011.11.17	非主要	F	なし	なし	あり	なし	なし	なし	なし
NF-12	あひるの空 BESTSELECTION		SPECIAL EDITION 1・2	日向武史	講談社	2012.3.16	非主要	F	あり	あり	在住	なし	言及	あり	なし

〈表2〉東日本大震災を主要なテーマとしないノンフィクション

ID	タイトル	巻数	サブタイトル・話数	作者	出版社	発表年月	主要／非主要／	F/NF	主人公／作者の体験	他者の経験	被災地訪問	津波被害の描写	原発事故の描写	被災地のがれきなどの描写	日本・日本人への言及
NN-1	うちの妻ってどうでしょう？	4	第104話～第109話	福満しげゆき	双葉社	2011.10.28	非主要	NF	あり	なし	なし	なし	メディア/言及	なし	あり
NN-2	まんが親	1	26話・28話・29話	吉田戦車	小学館	2011.12.5	非主要	NF	あり	なし	あり	言及	なし	あり	あり
NN-3	『ブッシメン！』	1	『実録！東日本大震災 あの日、あの時、宮城の片隅で』	小野洋一郎	講談社	2011.5.23	非主要	NF	あり	なし	在住	なし	言及	あり	あり
NN-4	とりパン	11	第289羽・第290羽	とりのなん子	講談社	2011.6.23	非主要	NF	あり	なし	在住	なし	なし	なし	なし
NN-5	とりったー		とりったー7 東日本大震災	とり・みき	徳間書店	2011.8.5	非主要	NF	あり	あり	なし	あり	あり	なし	なし
NN-6	中国嫁日記	2	第1章	井上 純一	エンターブレイン	2012.3.22	非主要	NF	あり	あり	なし	メディア	メディア	なし	あり
NN-7	『ゴーガイ！』	2	『東北が止まった日～岩手内陸の5日間～』	飛鳥あると	講談社	2011.6.13	非主要	NF	あり	なし	在住	メディア	なし	なし	あり

〈表3〉東日本大震災を主要なテーマとするノンフィクション

ID	タイトル	巻数	サブタイトル・話数	作者	出版社	発表年月	主要／非主要／	F/NF	主人公／作者の体験	他者の経験	被災地訪問	津波被害の描写	原発事故の描写	被災地のがれきなどの描写	日本・日本人への言及
MN-1	わたしたちの震災物語			井上きみどり	集英社	2011.11.23	主要	NF	あり	あり	在住	あり	あり	あり	あり
MN-2	3.11 東日本大震災 君と見た風景			平井寿信	文化社	2011.7.1	主要	NF	あり	伝聞	在住	メディア	メディア	なし	あり
MN-3	震災7日間			槻月沙江	プレビジョン	2011.9.30	主要	NF	あり	あり	在住	あり	メディア	あり	あり
MN-4	さんてつ 日本鉄道旅行地図帳 三陸鉄道 大震災の記録			吉本浩二	新潮社	2012.3.15	主要	NF	なし	あり	あり	あり	言及	あり	あり
MN-5	僕と日本が震えた日			鈴木みそ	徳間書店	2012.3.15	主要	NF	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
MN-6	1年後の3.11—被災地13のオフレコ話			ゆうみ・えこ	笠倉出版社	2012.4.10	主要	NF	あり	あり	在住	あり	なし	あり	あり

〈表 4〉東日本大震災を主要なテーマとするフィクション

ID	タイトル	巻数	サブタイトル・話数	作者	出版社	発表年月	主要／非主要／	F/NF	主人公／作者の体験	他者の経験	被災地訪問	津波被害の描写	原発事故の描写	被災地のがれきりなどの描写	日本・日本人への言及
NF-1	いつか、菜の花畑で～東日本大震災をわすれない～			みすこそ	扶桑社	2011.9.11	主要	F	なし	あり	なし	あり	言及	あり	なし
NF-2	なのはな			萩尾望都	小学館	2012.3.12	主要	F	なし	なし	なし	なし	言及	なし	なし
NF-3	原発幻魔大戦			いましろたかし	エンターブレイン	2012.3.8	主要	F	なし	なし	あり	なし	あり	なし	あり

〈表 5〉複数の分類にあたる短編が併録されている作品

ID	タイトル	巻数	サブタイトル・話数	作者	出版社	発表年月	主要／非主要／	F/NF	主人公／作者の体験	他者の経験	被災地訪問	津波被害の描写	原発事故の描写	被災地のがれきりなどの描写	日本・日本人への言及
	あの日からのマンガ			しりあがり寿	エンターブレイン	2011.8.5	併録	F	なし	なし	あり	メディア	メディア	あり	なし